

ジョジョの奇妙な冒険——タンザナイトは穢れない——

伝説の超三毛猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ジヨジヨの奇妙な冒険×五等分の花嫁 異色のコラボ!?

時は2017年。東京・A区では、行方不明者が前年度よりも数倍になっていた。

とある高校に通う高校生・北条錠磁は、次々と襲いかかる奇妙な出来事に巻き込まれていく!

目 次

プロローグ：冒険の終わりゝ或る夫婦の回顧録ゝ | | |
北条（ほうじょう） 錠磁（じょうじ）！ 上杉風太郎に会う | | |
4 1

プロローグ：冒険の終わり、或る夫婦の回顧録

「……まったく、なんの冗談だ？」コリヤ

水の流れる音と陶器が重なる音がわずかに聞こえるとある住宅のリビングにて、一人の男が手紙を片手に、宇宙の果てのような美しい群青色の瞳を手紙に向か左右させながらそそぼやく。

彼の髪は照明に照らされ紫に反射し、今は座っているが、立てば180センチは優に超すだろう大型の男だ。しかし、無駄のない筋肉質な体は同じくらいの体形の男性と比べ細身で、隣に立たれても威圧感は感じないだろう。

「何が冗談なの、あなた？」

水音がやみ、キッチンからそんな男の独り言を聞いたのか、女性が彼の隣にやつてくる。肩甲骨まで届くほどの長さの髪色は赤を基本とした明るい色で、ラフな普段着にエプロンを巻き、穏やかな笑顔をたたえた姿は、まさしく新妻である。

妻がいる方向に夫が視線を向ければ、彼女がそんな家庭的な姿で立つていて。夫は招待状をひらひらと見せ、妻に渡す。

「コイツを見ろよ、そうすりやあわかるぜ。」

「……あら、結婚式の招待状じゃない。」

妻の言う通り、夫が手に持っていたのは結婚式の招待状である。疑うまでもなく朗報を知らせるものの筈なのだが、知り合いが結ばれることの何が不満なのか、と視線で夫に問いかける。

「そうなんだがよ、見ろよ、新郎新婦のところ。」

「？……ああ、なるほど」

招待状の中にある、夫が不満を漏らす原因を目で追うと、やがて妻にも見知った名前がそこに記されているのが見えた。

——新郎

上杉風太郎。
うえすぎふうたろう

その名前は、夫婦にとつては特別なものだった。

「……私たちの友達じゃない。そんなにイヤ？ 結婚で先を越された

わけじやあないのに。」

「やめなさいも、新婦のところもちゃんと見かね、何と肩で娘が兄弟になつちまうんだぞッ！」

夫の言う通り、妻は新婦の所もしつかり確認していた。彼の言う通り、新婦の名前は妻のもつともよく知る者の名前であり……妻の姉妹だった。籍は既に入れていることだろう。これで、晴れて夫と風太郎は義兄弟となるわけだ。

「親友が家族になつてよかつたじやない」

「良くはないッ！ 何が悲しくて、あんな本場のドネルケバブの余りモノみてーに勉強以外を削いできたスカタンを兄弟呼ぱわりしきやあいけねーんだ！」

妻の笑顔に夫はツッコむ。しかし、言葉だけではボロクソに言つても、夫の表情までは嫌悪に満ちたそれにはなつておらず、むしろ『嬉しいけど複雑』って顔をしていた。

これでは妻があらあらとほほ笑むのも無理はないだろう。

「あなたと初めて出会った時も、風太郎に關してはそんなことはつか
り言つていたわね」

口ではなんだかんだ言いつつも、複雑な感情を隠しきれていない夫を前に妻は笑い出す。突然笑い出した妻が言い出した「初めて出会った時」を耳にした夫は、親友を罵るのをやめ、妻と同じようにその初対面の時を回顧することにする。

「そうだなあ……君と初めて出会つたのは……確か、高2の時だつけ?」「そう。私たちが黒薔薇女子高から転校してきて」

妻は夫にそう答えると一息おいて、

愛しい人の名前を呼んだ。

妻から久しぶりに名前を呼ばれた夫は、先程よりも赤くなつた顔を俯かせて妻の言葉に続ける。

「……そこからだ。あんな奇妙な日々が始まつたのは。」
「そうね。私も驚いたわ。

そこで初めてあなたが何者かを知つた。」

夫の言葉に相槌を打つた妻は自身の左手の薬指の指輪を見ながら
しみじみと、愛おしかつた日々を懐古する。

「俺も驚いたんだぜ。なにせ——五つ子の姉妹が転校してきただ
からよ」

彼女の懐古に、夫はそう返した。妻とお揃いの蒼い宝石——灰簾石タンザナイト——があしらわれた結婚指輪を見つめながら、静かな時は流れてい
く。

「ねえ、あなた」

「ん？」

「……私を選んでくれてありがとね」

「何言つてんだ。そんなの、今更だろ？」

一組の夫婦の惚氣た会話を爽やかな風が運びながら。

未来の話で大分脇道に逸れてしまつたが、物語はこの夫婦の語らい
よりいくらか昔——2017年より始まる。

これから語られる物語は、『天国』が存在しない世界で、一人の男
が“どある力”を持つ矢を巡つた争いを血の運命に縛られず、誇りを
持つて戦つた——その記録である。

物語の主人公の名は——北条錠磁ほうじょうじょうじ。

この物語では『ジョジョ』と呼ばれる、知られざる英雄である。
主人公

北条（ほうじょう） 錠磁（じょうじ）！ 上杉風太郎 に会う

時は2016年、4月。日本の、M県・S市杜王町の某所にて。
「それで……康一さん、仗助さん。今度は、俺は何をすればいいんですか？」

朝早くから呼び出され、現代のアパートつて感じの軽く洋風な廊下を歩いていった奥にある、いかにも社長室つて感じの部屋に俺——
北条錠磁（ほうじょうじょうじ）は呼び出された。

呼び出した部屋にいたのは二人。

ひとりは、ハイカラに改造されたスーツを身に纏つた、リーゼ——失礼、特徴的な髪型をしている男。真ん中の席——部屋がいかにも社長室つて感じなら、真ん中の机はいかにも社長席つて感じだ——に座っている。名前を東方仗助さんといい、俺が案内された建物——スピードワゴン財団ロバート・E・O・スピードワゴンが創設者を務める、医学、薬学、考古学等を専門にし、人々の福利厚生の為に動く財団。真の設立目的は石仮面の謎に迫ることらしい。日本支部の支部長となつている。

もうひとりは、スースーこそ独特に改造はされていないが、身長がとても低く、俺の腰くらいまでしかない男性。雰囲気は普通な印象を受け、それがこの場では逆に浮いてしまっているように感じる。こちらの名前は、**広瀬康一**（ひろせこういち）さんだ。彼もまたスピードワゴン財団日本支部の幹部である。

「わざわざ悪いなジョージ、どうしてもおめーにやつてもらいて一事があつてよ」

「構いませんよ。幼い頃からお二方や**億泰**（おくやす）さんにはお世話になつていますから」

「そう言つてもらえるとこつちも助かるよ」

ちなみに億泰さんというのはこの場にはいないお二人の友人のこ

とだ。本名は虹村億泰さんという。なんでも、仗助さんや康一さんは高校時代からの付き合いらしい。

「物心ついた時から見えるこのヴィジョン……スタンドについて、色々教えてくださいましたから」

そう呟いた俺が念じると、そいつは出てきた。

身長は常に俺と同じくらいで、蒼・銀・紫を基調としたメタリックなボディ、手には橢円形のタンザナイトの宝石のようなものがちりばめられ、顔は日本の武将が着けているかにような兜に覆われ、額には正三角形が三つ並んだ銀の三鱗^{みつうろこ}のマークが浮かんでいた。

ひとことでそいつを表すならば、『格闘派の武士』。日本刀はどこへ置いてきたって問いたしたいが、こいつは俺自身の精神そのものなのだからそんなことを言つても仕方がない。

スタンド。それは、人の精神の具現。Stand^傍_に by^つ_も meといふ由来のあるこのスタンドは、いわば超能力が具現化したようなもので、人それぞれに特殊能力があるという。俺のスタンドにもそういう特殊能力はあるが……今は省略しよう。

ただし……この力は、人をも殺しうる力。ゆえに、安易に振るつてはならない。そう教えてくれたのも仗助さん達だ。いつだつたか、試しに振るつたスタンドの拳が岩を蠅石を割るかのように簡単に粉碎した時は俺の持つている力に戦慄した。

「何言つてんだ。教えたのは俺だが、それを守つて、力にしてるのはおめーだろ?」

「そうだよ、錠磁君。君の『ミラクル・タンザナイト』は紛れもなく君の力だよ」

ちなみに、仗助さんからはスタンドの使い方だけではなく、名前までつけてもらつた。至れり尽くせりである。

「いえ、お二人のご指導あつてのものです——と、譲り合ひはこの辺にして、本題に入りませんか?」

「ああ、そうだな。本題なんだが……」

スタンドを引っ込めた俺の提案で「本題」に入つた仗助さんの顔は、

「親戚のお兄さん」から「スピードワゴン財団日本支部支部長」のそれへとあつという間に変わった。それに伴い、康一さんの表情も部屋の雰囲気も少し固くなつた気がする。

一体、俺に何を頼むんだろうか……

「どある人物から、借金を回収してきてほしい」

「しゃ、借金ンンンンンーーーーッ!!」

何を考えているんだこの人は!? 積極的に財団に協力しているとはいえ、俺はまだ15歳だぞッ!?

それなのに、借金の回収なんて重すぎるツ!!

「ちよ、ちよつと待つてください仗助さんツ！ なんで俺なんですか？ 借金を回収するのなら、他に適任がいるはずじやあないですか！ た、たとえば……そうツ！ 小林さん小林玉美のこと。金融機関の取立人をやつている。彼もスタンド使いである。……とか！」

「確かに小林さんは借金関連には詳しいけれど、どうしても日程が合わなくつて、しばらく財団^{こつち}のために動けないみたいなんだ。」

「承太郎さん空条承太郎のこと。海洋学者。現在は家族とアメリカに在住し、テキサスのスピードワゴン財團本部に務めている。も日本に来れねーし、億泰も忙しい。それに、この借金にはおめーん家^ちが絡んでいる。そこでおめーに白羽の矢が立つたわけだ。」

「俺の家が……？ 北条家がそいつに金を貸してるとか？」

「それだけだつたらよオ、おめーのお袋が何とかすりやあいい話だ。

ただ、そいつは……スピードワゴン財團の職員をダマくらかして、ヤツの家の借金を全部建て替えさせやがつた

「何やつてんすかそいつ……」

つまり、件の人物は北条家から金を借りてたけど、その借金を財團に肩代わりさせたってことか？

最近あの人人に貸してたお金が帰つてきたつて母さんが喜んでたけど、そんな裏があつたとは……

ただ、建て替えさせたところで、その人自身は得しないはずなんだ
けど……一体何を考えているんだ?

「おまけに、奴はかつてスピードワゴン財団の職員で、スタンド使い
だった」

「は!?」

なん……だと……今!　なんて言つた……ッ!?

「財団の職員……だと……!?　それに、スタンド使いつて……!!」

「俺と康一もそこへ行く。ただ、それなりの準備が必要なんだ。
ジョージ、お前には、先に奴の住んでいる場所に――東京に行つ
てくれねえか?」

☆☆☆☆☆

「と言われて、東京に来たはいいものの……」

あれよあれよと言う間に引っ越ししてきた場所は、東京都のA区と呼ばれる場所。人口・82,364人、面積10.5平方キロメートル、
人口密度7,300人/km²。東京都の比較的外側に位置する街だ。

「意外と、俺のイメージしてた東京とは違う街並みだな……」

俺はてつきり、東京都といえбаつて感じの、見上げれば首を痛めそ
うな高層ビルが所狭しと建ち並ぶ地域だと思っていたのだが、そうでは
はないらしい。

東京都内のベッドタウンの一つとして栄えたというこの区域には、
住宅街は勿論のこと、映画館やケーキ屋「REVIVAL」をはじめ
とした数多ある飲食店、ショッピングモールなど、住人のニーズに応
えた様々な建物が並び、そのほとんどが見上げる必要のない高さであ
るから、あまり堅苦しい雰囲気を与えない。

今年から、俺はここのある一軒家に住むこととなつた。後から北

条家の使用人が来るまでは実質一人暮らしになるだろう。

(まあ、スタンド使いがいるつて分かつてる以上、母さんまで巻き込む訳にはいかないもんな)

母さんは、この突然の引っ越しを意外にも「使用人付き」という条件だけで許してくれた。どうやら、仗助さん達が裏で話をつけてくれたみたいだ。母さんはスタンド使いじゃがないというのに、どうやって説得したんだろうか。

俺はこの街で、高校生として生活しつつ、スタンド使いから借金を回収しなくてはならない。その人物の住所の特定からしなければならないから大変かと思われたが、仗助さん達財団の方で、借金をしている人物の大まかな情報と家族構成は調べておいてくれたみたいだ。
「……上杉勇也さん。うえすぎ ゆうや元スピードワゴン財団の職員だったスタンド使
い、か……」

まだ見ぬ前途多難さに、ため息を一つつきながら、新しい制服の袖に腕を通す。

さて、転校生デビューはバツチリ決めないとな。これで高校生活が左右するも言つても過言じやない。

ただ――

「たつた一日でぶどうが丘から転校してきたなんて言つていいのか
……？」

受かって行く筈だった高校をたつた一日で転校せざるを得なくなつたのは流石に堪えた。ちよびつと泣いた。

「はじめまして。北条錠磁です。杜王町では『ジョージ』とか『ジョ

ジョ』って呼ばれてました。よろしくっす」

入った教室でそう自己紹介をした直後の休み時間。「どこに住んでたんだ?」とか「趣味は?」とか「杜王町つてどんな町なんだよ!?」とかの質問責めに遭った。いつの時代も転校生というものは注目されるようだ。俺はそれに、「杜王町はいい町だぜ、観光名所も多いしょオ~」とか、「趣味はコミック本集めかなあ~」とか、明るくウイットに富んだ返しをしていく。

学園モノの漫画では、高確率で転校生が登場することから、その異質さと、そこからくる目新しさがどれだけ需要があるかが伺えるだろう。

でもちよつと疲れるわ、コレ。

「……。」

その『目新しい転校生』とそれに群がる生徒たちを前に、俺には関係ないね、と言わんばかりになにかの単語帳をスマホを取り出してゲームをするような感覚で広げている同級生が一人、後ろの方の窓際に座っていた。鋭い三白眼と枝分かれしたアホ毛が目に付くが、それ以外は普通の黒髪の日本人の特徴と変わらない。

「なあ、あいつは……?」

「やめとけ! やめとけ!」

あいつは付き合いが悪いんだ。」

窓際の彼について聞こうとしたんだが、他の同級生にそう遮られてしまう。

『どこかに行こうぜ』って誘われても『勉強がある』って必ず断るんだ。楽しいんだか楽しくないんだか:

『上杉風太郎』。

勉強はまじめにこなしウチでは成績トップだが、今ひとつ情熱のない男……

悪いやつじゃあないんだが社交性なんてないに等しい……つまりの男さ

そう言つて窓際の男——上杉を紹介するのは、俺よりもふた周りくらい小柄な男。160くらいの身長に整つた黒い髪と目立つた髪や顔つきはしていないが、常に口元を隠している赤いマフラーが、彼をちょっと特徴的に見せた。

それにして……上杉風太郎、か。昼休みあたりにでも、話を聞くに行くか。

「…………ところで、君は？」

「服部誠。はっとりまことこの高校で疑問に思つたり、不便なことがあつたら言つてくれ。

……歓迎するよ、北条君。

いや…………ジョジョの方がいいかな？」

「ああ、ありがとう、服部。」

服部と握手を交わした俺は、これからの中学校生活や借金の回収が順風満帆に上手く行くことを予感していた。

——そんなこと、ありえないと言うのに。

☆☆☆☆☆

「焼き肉定食、焼き肉抜きで」

昼飯を食べようと思つた時、食堂のカウンターから聞こえた声に俺は戸惑いを隠せない。

焼き肉のない焼き肉定食なんて、ゴリラのいないドンキーロングみたいなものじやあないか。

そう思いながら声の主へ視線を移すと、そこには朝見た、鋭い三白眼と枝分かれしたアホ毛の男——上杉風太郎がいた。

服部から「社会性はないに等しい」と言っていたが、こっちには接觸する理由がある。

仗助さんから貰った上杉勇也のデータ。

そこに、彼の家族構成が載っていたのだ。

上杉勇也には二人の子供がいる。

風太郎という息子とらいはという娘だ。もしここで仲良くなれば、勇也さん相手に話しやすい話題が出来上がるというものだ。

個人情報の保護など、財団の力の前では筒抜けも同義らしい。

そんなプライバシーもへつたくれもない情報収集力に少し恐怖を覚えながらも、話しかけようとしたその時。

ぬツ、と。

「!?」

プレートを持った風太郎の足元の影に、人型っぽい何かが見えたのだ。

（な、何だ今のは!?　一瞬だつたからよく見えなかつたが、何かの人型のように見えた……！）

動搖している隙に、風太郎はさつさと食堂の端っこへ移動して、寂しい昼食の乗つたプレートを置いてしまつていい。

慌てて自分も注文した焼き肉定食（もちろん焼き肉付きだ）を受け取ると、偶然を装い風太郎の二つ隣の席に陣取る。

「君が、上杉君だよね？」

そして、勇気を持つて話しかけた。

声をかけた目つきの悪い同級生は視線を飯と味噌汁だけの寂しい昼食と片手の单語帳からこちらへちらつと移る。

「……。」

しかし、そのまま何事も無かつたかのように単語帳へと目を戻してしまった。

……まさか、無視しやがつたのか？　と思い、

「お、おいおい。会話ぐらいしてくれたつていいだろ？」

無視された苛立ちを抑えながら再び呼ぶと、そこでようやく

「…今朝の転校生か。何の用だ？」

風太郎が返事を口にする。

「いやあ、用つてほどじやがないんだけど、仲良くしたいなア～なんて…」

「興味ない。」

「ちよつと、そんな冷たくしなくてもいいじやあねーか。ただ話した
いだけなんだしよ～。」

「時間の無駄だし、勉強の邪魔だ。」

敵意の籠^{こも}った目で睨まれる。まるで、「お前みたいな人生勝ち組の
ド真ん中にいるようなヤツが近寄るんじやあねえ」って視線で語つ
いるかのようだ。

高圧的で、不遜な態度。そんなものを向けられたら、嫌でも分かつ
てしまう。

こりやあ、友達ができるワケだ。服部に「社交性なんてないに等
しい」なんて言われてしまうのも領ける。

冷静に分析しているように見えるが、俺はそれなりに頭に来てい
る。なんでこんなガリ勉の陰キャに馬鹿にされなきやあならないの
か。

俺自身、風太郎に近づいたのは下心からだから悪いところはある。
だが、だからといってここまで全面的に拒絶されていい気分になれる
ワケがない。

だから、ちょっと驚かせてやろう。

「……『ミラクル・タンザナイト』」

その囁き一つで、俺の体からあの武士が現れる。

蒼・銀・紫をベースにしたメタリックな鎧武者。その拳には、楕円形のタンザナイト宝石のような石が散りばめられている。

スタンドは、スタンドを持つていない人間には見ることができない。目の前にはミラクル・タンザナイトがいるというのに、風太郎はまつたくの無反応だ。父親がスタンド使いという点でもしかしたらと思っていたけれども、どうやら風太郎はスタンド使いではないようだ。それとも、見えていないフリをしているのだろうか？

もし彼に俺のスタンドが見えていたらそれはそれで驚かせられただろうが、反応がないならないで手はある。

そのアホみたいなアホ毛を、思いつきり引っ張つてやる。

ミラクル・タンザナイトの右手がゆっくりと風太郎の頭に伸びる。

そして――

グイツ！

「痛てッ!?」

突然やってきた頭への痛みに風太郎が声をあげた。

そんなに痛くしたつもりはない。俺のスタンド、ミラクル・タンザナイトは、精密動作には自信がある。ちょっと痛いが、引っ張られた驚きの方が大きくなるよう力加減はした。頭皮が破れるなんてしないはずだ。

「おい、北条！ 何故今俺の髪を引っ張った？」

「ン？ なんで俺だと思った？ この距離だと、俺はお前のアホ毛を引っ張ることなんてできないぜ？」

今の俺と風太郎の席関係では、アホ毛を引っ張る事はできない。普通の人間では手が届かないのだ。

それをいいことに、思いつきり風太郎からのお咎めにすつとぼける。

「一番俺に近い席のお前が怪しいだろ！」

「それこそ有り得ないぜ。ここに座つたままじやあ手が上杉君に届かない。」

実際に座つたまま俺自身の手を伸ばせば、風太郎の肩をギリギリ触れるくらいまでしか届かない。頭に触れられるまで手を伸ばすには、席を立つ必要がある。

「なら、席を立つたんだろう！」

「席を立つた音を聞いたかい？　俺は、席を立つちやあいないぜ？」

「いいや、絶対席を立つたんだ！」

席を立つた、立つてないと押し問答をしているその間にも、ミラクル・タンザナイトの手を風太郎の頭に近づける。まだイジリ足りない

そいつの顔は見えない。野球帽のつばで隠れている。全長5、60センチほどの少年のような人型が席の上に立っている。革ジャンにダメージドジーンズと、1980年代のアメリカンストリートで流行したファッショントイプのキャラクターのデザインをしており、声はどこか機械質だった。

『コレヨリ、『風太郎ノ護衛』及ビ『敵ノ排除』ヲ開始スル』

風太郎の護衛。それに、敵の排除、と。

ストリートにいそうな不良がまっすぐ俺に向かつてそう宣言する。間違いない。こいつ、スタンダードだ！

たつた今から、俺はスタンダードに攻撃されようとしているんだ！あまりに突然の宣戦布告に、冷や汗が頬を伝う。ここに来てようやく俺は、スタンダードで身内にスタンダード使いがいる風太郎にちよつかいをかけた軽率さを後悔した。